

なります。下肢と腹部の治療がうまくいったら、腰部に触れないときもあります。腰を治療する前に、腰痛が既に緩和されていることもあるのです。その場合、腰部への指圧は無理に行わず生体の治癒力で自然回復させてしまえばよいのです。無理はしないというのが鉄則です。

### 病人治療のための指圧普及を！

— 腰部への直接的な指圧が少ない印象ですが、患者は満足しますか。

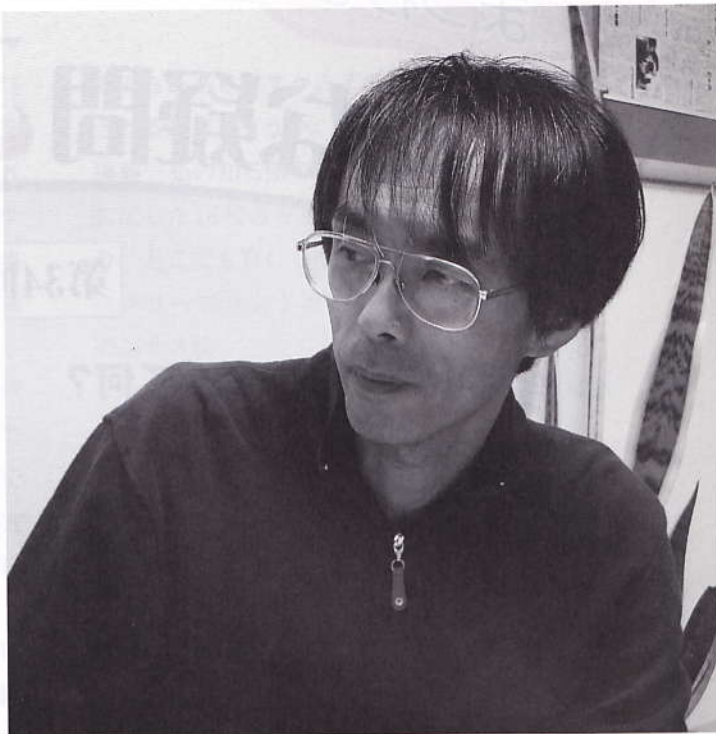
**藤崎** もちろん「なんと少しでも腰に指圧してほしい」とリクエストする人はいます。そういう人には軽い刺激で流す程度に行って、ちょっと気持ちがいいと感じてもらおうようにしています。しかし、基本は経絡指圧を行い、腰部に触る必要のないときは触らないのが原則です。

— 以上のような治療を、日を改めて3回ぐらいいれば効果が出ます。3回で臨床上よくなると実感しています。多くても5回ぐらいでしようか。

— 経絡指圧を目指す方にアドバイスなどはありますか。

**藤崎** 経絡指圧は三原則など通常の指圧をベースにしているところもありますが、全身指圧は経絡指圧にのっとった独特のものとなっています。まずは全身指圧を覚えて、それから経絡指圧の理論などを勉強していくことになります。特に全身指圧は、理屈抜きに行っても大きな治療効果がありますから必ずマスターしてほしいと思っています。

— 現代では病人治療は専ら病院がそれにあたっていますが、種々の病人に対し、精度の高い治療が必要とされます。それらの医療の一翼を担



藤崎信行（ふじさき・のぶゆき）氏

1954年、東京都生まれ。1975年、増永静氏の医王会に入門し、経絡指圧を修める。1979年、東京電機大学工学部卒業。1987年、日本指圧専門学校卒業。1988年、経絡指圧普及会を主宰し、指圧治療および経絡指圧セミナーを開始。国立身体障害者リハビリテーションセンターなどの国内をはじめ、アメリカ、カナダなど海外でも指圧のワークショップを行う。2004年に東京・池袋に治療院を移転し、現在に至る。

い、社会に貢献する（漢方で言う「虚証の病人）」という理念から、経絡指圧は生まれました。つまり「病人治療のための技術」。これが経絡指圧の目指すところです。

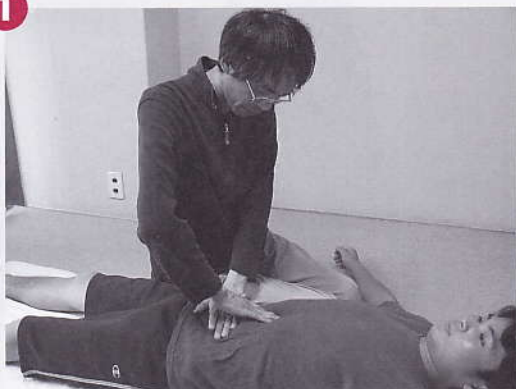
— 私の勉強会は経絡指圧の実務家の育成を目指しています。しかし、経絡指圧を学んで、地元に戻って開業したら、迷いが出て、治療が立ち行かなくなる人もいます。そんなことがないように、自ら考える力を養って経絡指圧を実践できる人をもっと増やしていきたいですね。

## 腰痛の経絡指圧(腹部の治療)

腰痛症は、腰椎前面に付着して骨盤や下肢にまで伸びている腸腰筋が攣縮し、その結果、腰椎が腹側に引っ張られ、その靭帯が伸ばされることで痛みを発する。また、腰椎はその構造上、第3腰椎や第4腰椎がズレやすいので、主にベルトのラインに痛みを感じる。経絡指圧では、このあたりを考慮して腹部の指圧に重点を置く。腹部を念入りに按摩することで、腹部の筋肉を弛緩させて、ズレた腰椎を元の位置に整復することができると考えている。

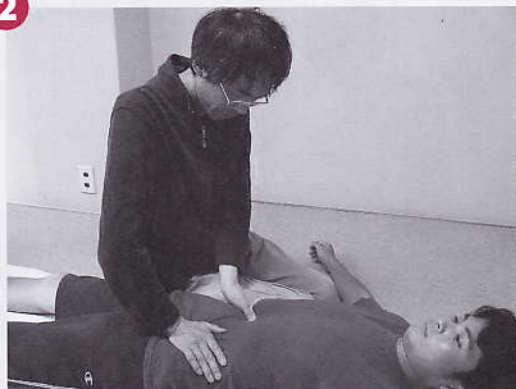
具体的には、経絡指圧の腹証の図に従って、じっくり時間をかけて各反応部位を按摩していく。なお腹部の指圧では、下腹部のコリに特に注意する。反応部位の場所と言えば、腎・膀胱の部位である。このあたりに邪骨(腹部のコリ)が出ていることがある。施術によってこれが小さくなると症状も楽になる。

1



① 手の3指で心を按摩している。腹部の硬さを取るのが目的なので、場所によって指を変えるが、指の形は特にこだわらなくてもよい。全部の腹部を按摩するが、順番は特に決まっていない。時計回りにまわるとわかりやすい

2



② 母指で胆を按摩している

3



③ 手根で大腸を按摩している。他の反応部位も同様に行っていく

## 腰痛の経絡指圧(腰部の治療)

腹部をしっかり按压したら、次に伏臥位に移る。

腰部は特に患部でもあるので、細心の注意を払って施術する。殊に背骨への直接の施術は避けるようにする。腸骨稜周辺から横突起にかけて徐々に解いていく。ここも粗暴な手技は禁物で、痛みを感じる患部に手掌をあてて、もう一方の手でその周囲を掌圧してみる。すると、その周囲に力なく窪んだところや堅くパンとしたところなどがある。つまり虚実がある。

この虚と思われるところに手を当て、持続圧を加えると患部が少しずつゆるんでいく。



① 両サイドの腸骨稜周辺に、肘を使って持続圧を加える。ここでも虚側から治療を始めて、次に実側へと移る



② もう1つ別の方法として、ベルトのあたりから握りこぶしぐらい上に手根を当てて持続圧を加える方法もある。軽度の腰痛なら、これでかなり軽快するという